

かと思うと、お気の毒であつたという感じがしないわけでもない。重ねて申述べるが、法規史の研究は、法制史の研究の基礎工作として大切なものではあるが、それだけが法制史の研究であると考えてはならない。過去のあらゆる時代の人々の生活意識にシンパサイズすることができて、その時代々に制定せられた法を当時の人々がどう受取つたか、またその法によつて当時の人々の福祉がどれだけ増進若しくは阻害せられたかがわかつてこそ、眞の法制史である。法制史学も、今や従來の臘を噛むような法規史の研究から脱却して、温い血の通つた法律生活史に進展してゆく時期に到達しかけているのではなからうか。

水戸部氏は、この研究を大成せられるに當つて、平安中期より鎌倉初期に至る大量の史料に眼を通されたとと思う。本書巻末の引用史料索引には、百種内外の書名しか挙げられていないが、水戸部氏が検索せられた史料は、それだけではないと思う。検索したが何の史料も得られなかつた文獻が幾らあつたかは知れたものではない。本書に載せられた新制の本文には、有職の読み癖による振仮名がつけられているが、この振仮名の一つにも多大の苦心と研究が積まれていると思う。冀くはこの龐大な記録文書を読破したことによつて獲られた知見を本として、私は水戸部氏に平安末期の法制史の専門家になつていただきたいと思う、律令、式目の時代の専門家はあつても、その過渡期の時代の専門家はいない。春秋に富まれる水戸部氏には、私の希望を叶えて下さる能力は充分あると期待している。

(A5判二九二頁 昭和三六年一月 東京創文社刊 定価一二〇〇円)

清水盛光
会田雄次 編

封建社会と共同体

井ヶ田 良治
瀬原 義生

村落共同体の研究が学界の関心事となつてから、すでに多数の研究が報告されている。しかし、その多くは個別的な村落の実体報告であるか、または、その正反対に、強い理論的問題意識に支えられた理論のみとおしかのいすれかであつた。とくに日本の村落共同体をとりあつかう場合、当然なされるべきヨーロッパその他諸地域の共同体との比較は、抽象化された理論の次元でのみ行なわれ、実体的具体的な比較は十分なされなかつた。このことが、日本の村落共同体の構造的後進性とその根づよい残存という認識を生み出した一つの原因となつていたことは争いえない事実である。その意味で本書のようにひろく各国を対象とする研究者の比較研究の成果をえたことは喜ばしいことである。本書は編者が「はしがき」にのべているように、まず村落共同体を封建社会に固有な時代的特質をもつものと限定し、「生産手段の共有ないし共用と再生産活動の共同とを基礎にして結ばれた、小経営農民の地縁的集団である」と包括的に定義する。そしてとくに従来ともすれば軽視されがちであつた「村落共同体と封建権力のあいだの政治的な関係」に注目しつつ、

①封建的支配の成立と村落共同体の起源 ②封建権力と村落共同体のあいだの勢力関係の変化による村落自治の発生 ③村落共同体の経済的基礎そのものの消滅、という三つの問題を追求している。

日 本 篇

第一論文黒田俊雄「村落共同体の中世的特質」はその副題「主として領主制の展開との関連において」でしられるように、本書の①の課題を解明したものである。

氏は領主制を厳密な意味での農奴のみならず、いわゆる「自由」身分の農民をもふくめて、地域的なひろがりのなかの全住民を支配し、地代を取取る支配組織として考える。氏によれば荘園領主も基本的には「古代的」でない領主制の一形態であるが、村落支配のありかたに「在地領主」との重要な相違があり、区別さるべきものである。そこで氏は荘園領主と村落共同体、在地領主と村落共同体、在地社寺と村落共同体の三つを個別的に検討し、中世村落の中世的特質を析出しようとする。

東大寺領玉井荘を中心にした第二章では、まず領主東大寺が十一・二世紀においても在地の用水の実態をまったく掌握できず、それがもつばら在地の荘司・田堵らのみの知るところであつたことを明らかにし、その前段階として、九世紀に古代の無主の山川藪沢から「民要地」が区別されたこと、それが班田農民の中から負名・田堵層が成長してきたことの証左であることを指摘し、このような田堵経営に寄生し地子・供御を取奪する荘園は、村落共同体を基礎としていないから、在地の具体的な問題を解決できないのは当然であるとされる。勿論、他庄との争いに際し「御庄近隣の山」「御領の山」

と称されるのは、実は、播磨の小犬丸保の場合にもみられるような農民自身の小経営の成立とその共用地の成立のあらわれである。しかし、田堵・住民の小経営の成立はそのまま村落共同体の形成を結果するのではなく、田堵層の家父長的奴隸制を本質にもつ「富豪の輩」と多数の弱小農民への分解が農奴制・領主制の成立へと結果することによつてはじめて村落共同体が成立する。氏はこのような観点から第三章で、在地領主の直接経営の展開として村落が形成される場合を村落共同体成立の基本的なものとしてとりあげる。三入荘の地頭熊谷氏の支配は保有農民化しつつある下人を支配する地頭・田畠の支配を基軸に、地頭名の農奴支配、さらに百姓名の領主的支配へと展開しておりこれが当時の村落の姿であつた。共同体の祭祀も地頭支配の一環に組織され、農民の共用地利用もまた領主経営の一端としてあらわれざるをえず、氏によれば「まさに村落共同体の機構の一部が地頭の経営」支配につつまこまれていたのである。一三世紀の所領の分割に際し、名単位、農民の保有地単位の分割から地域的分割に変化する傾向がみられるが、それは、領主支配が、人格支配から土地の支配へ、経営的性格よりは領有的性格へと発展したからである。こうして所領分割は領有権の不分割、地主的所領の分割の結合として惣領制を持続させ、南北朝以後は村落支配的な領主連合にまですすむのである。この三入荘の例を氏は領主の在地居住と小所領的経営のゆえに、いわゆる村落自治の成立しなかつた例とし、村落自治の問題を畿内先進地帯の在地社寺と村落の関係に求める。第四章で、山城禪定寺、摂津の寂福寺、近江の多賀神社、大島奥津島神社の諸座を検討した氏は、農民的な宮座と領

主的な宮座の二形態を抽出し、さらに農民的な宮座は重層的な関係をもち、この村落の座の構成をこそ中世村落の基本的性格とすべきだと主張する。莊園領主が封建的領主的性格をつよめつつある中世において、自由農民的性格をのこしつつ隷屬農民化しつつある農民の村落共同体、これが中世の村落共同体である。そして畿内における早期の村落自治とは、所詮在地領主たりえぬ莊園領主の莊園の中で、領主の所領支配権・檢断権の一部を集团的に取得した近畿農村の特殊の早熟的状态である。以上が氏の所論の概要である。

氏の基本的な考え方は既に発表された他の諸論文にのべられているが、ここで関係する限りでいえば、封建制の成立を、奴隸の農奴への進化の側面のみでなく、自由農民の階層分化と統一的にとらえて把握すべしという主張がその根柢となつてゐる。そこから農奴制の成立・農民小経営の成立をみる場合、過渡的に小経営の中に家内奴隸が含まれていることは毫も農奴制が成立したとするさまたげにならないし、家内奴隸を従えた農民を支配する領主制を封建的領主制と称してもよいとする議論が生れてゐるのである。全体として教えられるところが多く、今後多くの議論を生むであらう。ただ、いくつかの希望をのべれば、一つには、田堵経営成立以前の共同体、原始的または古代的共同体との差異と構造的歴史的関連についてふれられていなかつたことが残念であり、二つには、包括的に村落共同体の特質を抽出することに努力された結果、平安時代から室町にいたる全期間を自由農民の両極分解と家内奴隸の保有農民化の統一的过程という一直線の過程としてみとらえられたことである。もし、氏が封建制の成立を鎌倉期以前におくならば、成立以後、江戸

時代の封建制にいたる過程をそれ以前とは質的にちがつた構造的変化の過程としてとらえなければならないはずである。たとえば、領主所領の農民保有地単位の分割から地域的分割への変化も、農業経営自体の構造的変化との関連でとらえてはしかつた。このことは本論の範囲の外であり、氏が後日の機会にのこされた問題であらうが、それだけに今後期待したいところである。

第二論文、宮川満「村落共同体の近世的展開」は、第一論文のあとをうけて、越前国岡本村の中世末期から近世前期にかけての分析である。すでに小栗田淳教授編著『岡本村史』に詳細な歴史的叙述があり、ここではもっぱら村落共同体の構造と対領主関係に焦点がしぼられている。

氏はまず、中世末期に小農民の成長・職の分化に対応して村ごとに自治村落としての惣が形成されたことを明らかにする。氏は莊園領主体制的な名主・作人職の制度的外被をばざとり、当時の惣が、①加地子取得の有力農民、②血縁または非血縁の小経営者から賦役を收取する有力農民、③独立小農民、④有力農民の賦役経営に参加する小農民からなり、②と④との間に族縁共同体関係があつたと主張する。村毎の惣は、加地子名主職の領主への集中の結果、有力農民と小農とが対領主関係において共通の利害関係に立ち、ともに結束して形成したものである。しかも、当時のいわゆる入り組み支配、散がかり支配関係はこれら惣の発達によつて政治的な制約となつてゐた。太閤検地はこれに決定的変化を与えた。太閤検地は中世的な複雑な占有関係を一掃し、名主的・地主的占有を否定し、作人的占有のみを認めた。つまり、村落共同体員の経営や家族構成を直接か

えたのではなく、占有関係を整理したにすぎない。だが、その結果村落共同体の構造変化をもたらした。村は居屋敷をもつ頭分の百姓たる大目、屋敷畠をもつ雑家百姓たる中目、畠のみをもつ水呑百姓小目によつて構成され、その他に部屋住がいる。太閤検地はこの大目・中目・小目を全部高請百姓とし、その限り小農民保護の一面をもつたと評価される。これに照応して村の自治的機能は領主の行政的機能へくみ入れられていつた。氏はさらに近世前期の岡本村を検討し、各部落が経済的条件により遅速の差はあつても、元禄・享保期までに、高持と水呑という新しい階層に分解したことを明らかにし、それに照応して、領主側は身分的統制を強化し、高請農民のそれ以上の変質を阻止しようとし、収取を強化していつたことをのべたあと、村自体の機能も、積極的・能動的・対抗的であつたものが消極的・受動的・順応的になり、行政村的性格をつよめたと主張する。最後に近世中期の各村の騒動が、有力農民から共同体の制約をうけていた小農民の成長にもとづく村落共同体の転換期の到来を示し、封建制の危機を表現するものであることをのべて稿をとしていゝる。氏の所論はすでに大著『太閤検地論』に詳細に展開されており、岡本村については『岡本村史』があるので、この論文のみで敢えて論評はできないが、二三の注文をいわせていただく。一つには村落の自治的機能の行政的機能への転換、消極的から積極的へというのは、詳細な村落構造の分析の結果としては余りにも平板である。これは構造・機能という論文叙述の機械的「節」立てによるのであらうが、読者の希望としては、『岡本村史』との重複を心配されず、農業経営の構造的变化と、村落共同体の存在理由の変質、山利用の

実態、さらに、領主の対応を有機的に統一して叙述し大胆な仮説をも提出してはしかつた。第二に資料の制約もあらうが、中世の惣と、中世末期以来の小部落の村落共同体とが、どのようなかわりあいをもつていたのか、おそらく重層的関係にあり、それが第一論文の中世の座の重層的關係と関連しているであらうが、その点を明らかにして共同研究の内容を生かしてはしかつた。第三に、太閤検地段階の大目・中目・小目による村落構造は基本的には中世的なのか、または近世的なのか、いいかえれば、族縁共同体的構成の存続なのか、残存なのか、この点こそが太閤検地の評価のかなめであるが著者はどちらとされるのか。この不明確さは畢竟、族縁共同体という著者の類型規定が、家父長制的経営から小経営への過渡的現象を、別の独立した一段階として類型化したところからくると思うが、いかなるものであらうか。

第三論文前田正治「法と村落共同体」は、氏の長年の研究たる近世村法、とくにその共同体規制の性格を制裁を通じて検討し、領主法との関係を論じたものである。領主の刑罰権と村の制裁権の關係が默示的委任と默認の關係にあるというのが氏の主張であるが、その詳細な展開は法制史学会編『刑罰と国家權力』所収の氏の論文にあるのでここではふれない。村法を通じてあらわれる村落共同体の具体的活動の様態を知りえて興味深い。できれば江戸時代全体の村落構造の変化に対応して、村法にあらわれる村落共同体の機能が変化するかどうかが、また地域の乃至は経済的な村柄の差異によつて村法自体が分類できないものか、戦後の社会経済史研究の成果とどこでかわりあうのかを今後御教示いただきたいものである。

第四論文太田武男「村落共同体と村制裁」は、但馬の旧三宅村の大己貴講の実態分析である。三宅村では明治以降に村制裁権が大己貴講に委譲された。大己貴講は、「若連中」の組織を母体としながら、それを利用しつつ村の支配層により再編成されたもので、明治二十年頃から村制裁の代行機関となった。氏は大己貴講の組織、会議、制裁の様態をくわしくのべ、それが大正末期までつづき、昭和初年にいたつてやつとその機能を停止したことを明らかにしたのち、大己貴講による村制裁は、近世自治の村落共同体の遺制であり、それが大正以降にまで残つたことは日本の真の近代化がいかに困難であつたかを物語るものと結論される。具体的実態報告であるので、論評のかぎりではないが、本書の趣旨からすれば、いわゆる村落共同体はマニユ段階では解体せず、産業革命によつてはじめて解体するという西洋篇の飯沼氏の問題提起とどのように関連しているのか。また村制裁権の大己貴講への委譲が明治二〇年頃であるとするれば、市町村制成立にともなう町村合併（明治二三年）と関連がないのか。関連ありとすれば、その「委譲」という変化をどのように評価するのかにふれてはしかつた。

西 欧 篇

まず三好正喜「ドイツ中世初期の村落とホーフ」は、西南ドイツを中心としながら、七〜九世紀の村落共同体の成立と展開を取扱う。集村定住の経済的基底をなす三圃式ゲヴァン耕地は、エッシェ型耕地（Langstreifenur）あるいはブロック型耕地から進化したもので、その進化の契機となつたものは、従来の「重い型」にかわる「軽い型」の導入である。集落の構成は、行列塚式墓地の発掘分析

によれば、屋敷持ち農民、小農民、隷属民からなり、その間には從士制的支配関係があつたと推定される。さらに屋敷持ち農民の家族構成をみると、家長家族に未分離の小農民家族が附属するという家の複合体をなし、しかも家長と小農民、家長と家族員の間に専制的家長支配はなく、相対的独立性がみとめられる。そして、カロリング時代に入つて、この屋敷持ち農民家族は分裂し、全集落にわたつて、封建的土地所有の基底をなす小経営農民の一般的成立がみられる、と結論づけている。多岐にわたる研究分野の成果を綜合し、初期村落の構成および家族構造に迫ろうとした意図はある程度成功したといえるが、その反面、叙述が前半部で抽象的になつたこともいふめない。ことに理論の出発点となる H. von の研究紹介にあつては、図版をあげての具体的な緻密な考察がほしかつた。

中村賢二郎「ドイツにおける村落共同体とその自治的権利」もまた、村落自治の問題だけでなく、村落共同体の成立について論及している。まず、Münchweiler, Betsch 村（いずれもエルザス）の莊園法を分析して、一二世紀末に村落自治の成立を求めたのち、村落共同体の形成期を問ひ、いわゆる従来の莊園団体そのものが実は村落共同体であり、「それは九世紀中頃以降バン領主の支配下に形成された」ものであるとしている。村落自治が一二世紀末ごろより生成してくる点は、判告書出現の状況からいつても、大体異論ないが、Münchweiler 莊園法を村落自治をみとめていないものとして、ことさら Betsch 莊法と対比させるのは無理ではないかとおもう。さらに、Münchweiler 莊法第二一、二二条を手がかりとして、莊園団体・村落共同体、そしてその九世紀成立を主張するのは疑問なし

としない。一体に、このもつとも重要な論点については抽象的にかのべられていないのであつて、バン領主制の出現、荘園団体の構成などの具体的追求が今後の課題ではないかと考える。

鯖田豊之「フランス封建社会の発展と村落共同体——マコネ地方の場合——」は、最近同氏の著書『封建支配の成立と村落共同体』においてより詳細に、広い視野から再論されているようであるが、ここではこの論文自体にかぎつてみよう。その論点は、カロリング遺制期（一〇世紀）マコネ地方における農民は、自由民、セルフたるを問わず、比較的独立性の高い経営をもち、小村集落をなして、自由農民の共同体を形造つていたこと、ついで十一世紀、バン領主が出現し、小村定住を村落共同体に集中化・再編成し、このころ併行して「中世農業革命」が進行すること、さいごにカペー王権のこの地方への進出があり、王権進出の支柱となつた富裕農民層の主導のもとに村落自治体が成立すること、などである。非常に豊富な史料に裏付けられて、きわめて説得的であり、理論構成も明快なのであるが、しかし細かく検討すると、いくつかの点で理論および史料解釈に飛躍があるようにおもわれる。たとえばバン領主の登場（三八〇頁以下）としてあげられている二、三の史実は、なんら一円的領域支配圏の形成を示すものではなく、荘園領主制下においても十分ありうることであるし、また王権の進出にしても、それが「バン領主の領域支配権の集積という形で確立して」いつたというばあい、一体国王がマコネ地方の個々の地域のバン領主となるのか、マコネ全域のバン領主になるのか、あるいは王がバン領主を封建法的秩序下にくみこむことを意味するのか、はつきりしないのである。鯖田

氏の理解は最初のようなのであるが、あげられている事例（四〇八頁以下）はむしろ封建法的秩序づけを物語つてゐる。大体、カロリング遺制期にあらだけ独立自営的自由農民の残存をみるというのは、マコネ地方が相当特殊な地域であることを示すものではなからうか。つぎの論文、清水盛光「フランスにおける村落共同体の自治」は、バン領主による村落共同体の組織化という鯖田説に対してやや批判的なようで、むしろ、経済生活の共同性に村落共同体の本質を見ようとする。そして、十二・三世紀以降の農民解放、農民の闘争、村落自治権の獲得、自治特許状の賦与・公認、プロキユール、サンディク、あるいはブリュドムとよばれる共同体代表者の選出などに説きおよんでいる。ことに自治確立後の村落が、経済的社会的にだいに分裂し、村内有力者層が村落自治に必要な役職のすべてに対して回避的態度に出るようになるという結論の指摘は興味ふかい。新奇な問題を提起しようと思つたものではないが、これまで空白であつた分野に着実な説明を与え、読者の臨む態度によつては多くの問題を引きださうな労作ではないかとおもう。

会田雄次「都市共同体とイタリア都市の特質」は、二部にわかれ、第一部では、村落共同体とことなつた都市の防禦共同体としての性格を論ずる。そのさい、都市のフリーデの問題と、フリーデ違反に対する所謂としての家屋破壊に力点を置いているが、大体都市のフリーデというのは、氏のいうように対外的防禦に主眼があるのではなく、内部的治安維持にあつたものではなからうか。そして、内部治安攪乱の中心は、初期には多く市政指導派に対する反主流の都市貴族であつて、彼らにとつて家屋破壊などさして痛痒事ではなかつた

はずである。従つてこの家屋破壊刑が具体的にどうあつたのか、の具体的叙述がのぞまれる。第二部は、なぜイタリア都市が貴族都市の性格をおびるにいたつたかを取扱い、この要因として、商人の政權参加、封建領主層の市民化・商人化、両者の融合をあげ、その背景としての地中海商業の恒常的な遠距離貿易的特質、都市内部における商人層の圧倒的経済力、政治力について、フィレンツェ市を中心としながら詳細にのべている。

・さいごの二論文はイギリスに関するものである。まず富岡次郎「イギリスにおける自治村落の成立と解体」は、北部の森林地帯ロツセンデイルと開放耕地制中部地帯の村落自治史をたどつたものであるが、かつて『人文学報』九、十一号、さらには飯沼・富岡共著

『資本主義成立の研究』（一九六〇）後篇に掲載された論文であり、全体的な批評はすでに『西洋史学』四六、四八号にみられる。ただこのさい一つだけとくに指摘しておきたい点は、「中部イングランドでは、ほぼ十三——十五世紀の間に、古典荘園が地代荘園に転化した。これは農業経営形態における二圃制から三圃制への移行に照応している。グレイによれば、中部イングランドにおいて、二圃制から三圃制への移行は十三・四世紀であつた……古典荘園の解体・農民商品経済の発展の技術的基礎は三圃制の成立にあつた」（五九六頁）と、こともなげにのべている箇所である。この構想は鯖田論文の中世農業革命のそれと対応するもののように受取れるが、この重要な事実をなんら具体的説明なしに投げ出すのはどうかとおもう。グレイの見解はすでに学界の共通意見となつているのだろうか。

飯沼二郎「イギリスにおける村落共同体の解体——マニユファク

チュア段階の終焉と村落共同体」。これもすでに前掲著書前篇第五章、第六章に大要収録されたものであるが、副題の示すごとく、マニユの側面から村落共同体の解体に迫ろうとする。すなわち、開放耕地制をもたず、従つて比較的早期に村落共同体が解体するロツセンデイルでは、前貸資本もまた近代性をおび、非常に早くから工場制生産に突入するのに対して、開放耕地制をもち、従つて共同体の解体、農民層の分解が比較のおそく進行する中部地帯では、問屋制もまた前期的性格をおび、産業資本の自由な展開を阻止する。ノッチンガムの村落共同体が完全に解体するのは、工場制が普及する十九世紀中葉からである、と結んでいる。

*

*

以上、ながながと、しかも意をつくせぬ論評を行つてきたが、各論文とも六年間の研究の結晶物としてまことに堂々たるものがあり、その蓄積は外部からははかり知れない深さを感じさせる。それこそ共同研究というものの強みであろう。と同時に、多くの共同研究がそうであるように、本書のばあいにも残念ながら、全体としてなにをいおうとしたのか、という一本の金線を明瞭には見出すことができなかつたようにおもう。なにか新しいことをいっている、ということが感得されるだけに、いま一步の大胆な問題提起が巻頭にほしかつたのは筆者だけではあるまい。諸論文に瞥見される新しい方向がまとめられて、封建社会分析のより斬新な体系的な方法論にまで高められることをこの共同研究会に期待して、筆をおくことにする。

（A5判 六六四頁 昭和三十六年三月 創文社刊 二、〇〇〇円）